



元は「細々村」といった。

昭和から国道381号を西に向かい、十和トンネルの手前で左の旧道へ入ると河内である。四手崎などと同様、穿入蛇行の内側にある半島地形の典型を成している。

元は「細々村」といい、東隣の「窪川(久保川)村」や、その北方にある「大道村」などと共に、四万十川南岸に位置する「小野村」を構成する一村であった。小野村と窪川村に庄屋が置かれ、細々村には窪川村から名本(庄屋の部下)が派遣されていたと、江戸中期の記録にある。

「細々」という集落名の由来はよくわかっていない。この名は、昭和32年の十和村誕生を機に「河内」と改称されるまで続いた。

新しい命への愛が伝わる「よだれ掛け」

産土神は河内神社である。神社の横から裏山を登って行くと、昔の往還道の辻に出る。そこにお堂があり「子安地藏」が祀られている。かつては、安産祈願や、出産後のお礼に訪れる人が多かったらしく、お堂には今も「よだれ掛け」が並んでいて、祈願やお礼に訪れた人々の温かい思いを感じる。

地区には永徳山高雲寺という寺院があった。小野にある願成寺の末寺で、建立年代は不明。一時期は廃寺になっていたが江戸中期に再興されたという。昭和57年に集会所内に移され、数体の仏像が安置されている。



河内歴史の碑と切あけさまの五輪塔

三人の「きりあけさま」

この集会所の敷地に三基の五輪塔がある。二基が桃山時代、一基が江戸時代のもので、この地の開拓者「切あけ様」とされる3人を祀っているそうだ。また、五輪塔の前には地区の歴史を刻んだ碑が建っている。

さて、湾曲する地区南端の対岸が、大雨によって大きく崩落したことがあったらしい。その場所を境に、上と下で河原の石の様相が異なっているという。明治23年の大水害の時ではないかと推察されているらしいのだが、詳細について知る人がすでにいない。

河内は、古くからの祭事が律儀に行われている地区のひとつである。地区の方のお話から、生活形態や価値観の変化などの時代の移ろいに抗うというより「この地を知りたい。伝えたい」といった純粋な思いであることがわかる。同じことが、地区の成り立ちを記した集会所敷地にある碑からも伝わる。小さな集落の、名もなき人々の暮らしの記録や習俗こそ、重要な歴史遺産であることを改めて思う河内地区である。

町のうごき

(11月30日)	人	口	前月比	出生	死亡	転入	転出
男	7,426	-5		男 2	9	16	14
女	8,012	-14		女 4	16	13	15
計	15,438	-19		計 6	25	29	29
世帯数	8,081	-8		(11月中の届出)			

窪川地域 10,990人 大正地域 2,115人 十和地域 2,333人